

ある不安神経症者の心理療法過程*

—心の故郷への回帰と新たな出発—

池田博和

I はじめに

すでに周知のごとく、うつ病のひとつに「実存うつ病」(Häfner, H.)という病名がある。これはいわゆる実存的危機の状況下で、その人固有の価値実現の可能性が遮断され、その精神的悲哀感からますます別の新たな価値発見も不可能となり、結局、全面的な価値喪失と深い抑うつ状態に陥ることによって生じてくるうつ病のことである。しかしながら、そのような実存的契機、すなわち自らの人生のうちにどう生きがいや生きることの価値と意味とをみいだすのかということにかかわる問題が、危機的様相を呈してくるのは無論、うつ病だけに限られるわけではない。それはむしろ、精神分裂病であれ妄想性精神病やてんかんであれ、あるいは神経症や異常性格であれ、およそどんな精神的疾患や危機状態にあっても、その発症にそのような実存的契機の問題化が含まれていないようなものはないといわなくてはならない。

ここでは、特にそうした実存的契機に焦点をあてて、かなりドラマティックに経過したある不安神経症の女性についての事例報告をなしたいと思う。このごく具体的な生の歩みの中から、人が生きること一般に関する様々な側面についての心理学的示唆が与えられることになるはずである。

II 症例

29歳の主婦、麗子。33歳の夫との間には小学校1年生の一人娘がある。主訴は心悸亢進と不安発作、および頭痛、肩こり、嘔気気その他の身体的諸症状。内科的、生化学的諸検査はすべて異常なし。生活史的に複雑なものがありそうであり、心理療法を中心にトリートを進めるために、彼女は外来の精神科医から筆者のもとに回されて来た。ある年の6月はじめのことであった。

早速会ってみると、いわゆる「主婦」というイメージ

The process of psychotherapy for a case in the anxiety-neurosis.

* 本論の概要は、東海心理学会第28回大会(1979、岐阜大学)において発表された。

とはかなり異なって、そこにあらわれたのは憔悴してはいるものの、若々しく落ち着いていて、少々「粹な」感じを与える女性であった。その大きな瞳はあざやかな化粧で一層強調され、長い髪の毛のほっそりとした身体は、ダークな装いにつつまれていた。その印象は、丁寧で明晰な話し方にしても、背すじをのばして身を崩さない姿勢にしても、ともかく非常にきちんとした人であるという感じが強かった。それはいわば中流の優雅な家庭婦人という趣きであったが、それだけに彼女の夫の職業がタクシ-の運転手であると聞いた時には、何か少々の違和感が覚えられたものであった。

1. 初回面接

話をうながすと、彼女はまず夫への不満から切りだした。

「家でじっとしていると、つい考え込んでしまうんです。子供のことや主人のことが、ほんのちょっとしたことも心配になって、そんなことで毎日がイライラとした状態です。主人はとにかくお金にルーズなんです。お給料をもらっても、借金の方が多くてその場で全部なくなってしまうんです。主人の考えは、普通の人とは大分違うんです。人のものでも、会社の車などでも、勝手にどんどん売り払ってしまって、競馬でも何でもやってしまうような人ですから、飲みについてもお金を払わないので、よく借金とりの人に怒鳴り込まれたりして、夜逃げのような形で今の住所のところに移ったんです。そんなことから、偶然知った人の顔をみかけるとドキッとして、思わず顔をそむけてしまうんです。

私はそういうルーズなことは嫌いなので、何とか借りてきては返しに行って、それでもすぐ怒られて地面に手をつけて謝って、ようやく許してもらったようなこともよくありました。主人はそんなことは何とも思っていないで、そんなふうにして私がお金を返すと、逆に何でそんなことをしたかといって怒るんです。

主人は出鱈目ばかりやってきましたけど、それでも根が優しいものですから、優しいだけ取り柄で、あれでもし暴力をふるような人だったら、とても今まで耐えてはこれなかったと思います。今のところに越してきてからは、少しは人が変わったみたいで、最近は大いにおおさまってきましたけど、でもまた、いつタクシ-はもうやめたといいたすのではないかと思うと気になって……。

それに子供には、盗癖があるのではないかと考えるんです。

買ってやってないものを持って、それはどうしたのと訊くと嘘をつくので、つい怒鳴りつけてしまうんです。だから子供は私におびえていて、私の前では少しも子供らしくなくて、それに対してまた腹が立って、ますます悪循環になってしまいます。

母も近くに住んでいるんですけど、まだ妹が小さいので働いていて、何とかしてあげたいと思っても、今の状態では何もできるはずもないし……。義父は母の姪に手をだして結婚してしまい、母は追いだされてこちらにきたんです。そういうことから主人との間に夫婦関係も持たなくなって、私はどうしても主人を受け入れることができなくなってしまいました。小さい頃のことを思い出されて、義父の顔が浮かぶと、思わずぞっとして身のすくむ思いがします。父はもう並の人ではなくて、性格異常者みたいな人でしたから、毎日のように母を叩いて怪我をさせたりして、小さいうちから父を憎むようになってしまいました。憎みながらも、怖くて怖くて……。」

こうしたことを語りながら、彼女は初回から何度も涙を落とした。たしかに様々に複雑な問題が山積していたし、彼女はそのどれをも話さなければと思っているかのようによく話した。治療者がそれらの症状の疾病論的位置づけなどについてよく説明したうえで、そうした色々な精神的問題をゆっくりとひとつづつ整理していけば、身体の調子も必ずよくなるでしょうということ、彼女はその瞳に決意の色を示し、「私もこれまで誰にも話せなかったことのすべてを話さなければ、決して自分のことをわかってはもらえないと感じてきた」と述べて大きくうなずいた。ここで治療契約が確認され、できれば御主人とも会いたいという旨が伝えられた。

2. 内的生活史

その後の面接の中で、彼女はまさに堰をきったように語ったが、こうして明らかにされていった彼女の生活史を、ここであらかじめ彼女の言葉に沿って再構成すると次のようになる。

麗子が生まれるとまもなく、両親は離婚し、母は働くために彼女を祖父のところにあずけた。彼女が3歳の時、やもめ暮しであった祖父は再婚し、彼女は施設に送られた。それを知った母は、自分の働いていた金沢に彼女を引き取ったが、母は当時25歳で、子供をかかえて女手ひとつでやっていくのは楽ではなかった。彼女は結局、水商売に入り、これはずっとあとになって語られたことであるが、実際には、売春をしていたのであった。母はいつも飲んだくれて、麗子は飲み屋の二階におきざりにされていた。母はいつも決して彼女の母親ではなく、ひとりの自由で奔放な「女」であった。母はまるで中毒のように大酒を飲み、飲むと人が変わったようにしゃべり、わめきちらして、だらしのない「女」の最も醜悪な姿をさらけだしていた。麗子には、そんな母が嫌で嫌で仕方がなかった。母の胸に甘えたようなこともなく、子供時代にはなつかしいというような思い出はひとつも残っていない。

小学校1年の時、母はそうした生活の中で知りあった男と結婚した。義父は経済的にははぶりがよかったが、性格は並みの人間とは思えなかった。何のかのとって、毎日のように母を叩き、来客の面前で食卓をひっくり返して母を追いかけまわし、血をみるまで暴行を加えた。切傷や骨折で母は何度も入院したし、父自身が母を追いかけまわしている時にころび、持っていた包丁で大怪我をして入院したこともある。父は麗子には暴力をふるわなかったが、内心は彼女が父になつこうとしないことや身体の弱いことが不満で、それがまた母に当たりちらす理由となった。

母親はまた、大酒を飲むようになっていた。義父に耐えられない気持は、麗子にはよくわかっていたが、それを酒でうさ晴らしするのは嫌なことであった。麗子は何度も母と一緒に家を出ようとして、泣いたり怒ったりして頼んだが、母はあんたのためだからといって、決してそうしようとはしなかった。

麗子はいつも抑えつけられていて、欲求不満のかたまりみだだった。両親の顔色ばかりうかがって、いつもいい子にしている必要があった。そのため、少しも子供らしいところがなく、外にでると反抗的で、いじめっ子をとことん追いかけて叩いたりするので、男の子から恐れられていた。

中学に入った頃から、麗子には父親の嫌らしい視線が気になっていて、中学3年の、母親が郷里に帰っていたある夜、麗子が受験勉強をしていると、父親が入ってきて今夜は一緒に寝ようと切りだした。麗子が躊躇しつつ断ると、父はいきなり彼女をなぐりつけ無理矢理、彼女を部屋につれていこうとした。彼女が大声で泣きわめいたため、結局父はあきらめたが、三日して母が帰ってくると、知らん顔でもとの暴力亭主にもどっていた。母親にそのことを話しても、母親は何もいわなかった。それを黙認した母が許せないという思いだけが残った。

高校は地元の公立に落ちたので、父の出身地に近い名古屋近郊の私立高校に入学し、寮に入った。もし、あのままあの家にいたら、今頃はどうなっていたのかと思うと、麗子は今でもぞっとする。その頃から母親の姉の娘、つまり彼女のいとこで三歳年下の女の子が実家の家事手伝いにくるようになっていた。夏休みに帰った時、麗子はこのいとこと同じ部屋で寝ていたが、夜中にもふと目覚めると、父が入ってきていてその黒い影がいとこの上におおいかぶさろうとしていた。麗子が「何をしているの！」と叫ぶと、父親は黙って部屋をでていった。

高校2年の時、母は義父との間の子を産んだ。麗子とは17歳ちがいの異父妹ということになる。

名古屋で短大に進み、2年生になった春、現在の夫から積極的にのぞまれて、麗子は結婚した。短大は中退。このことは母にしか知らせず、しばらくは身をひそめているような生活だったが、義父から離れられて、せいせいいい感じがしていた。夫は父とは正反対に非常に優しく、人からの受けもいい人だった。彼女はいわゆる世間知らずで、現実の生活がどういふものかもわからず、夫がどういふふうにして収入を得てきてくれるかも知らなかった。

しばらくして、そうしたことが段々わかりはじめてきた頃から、夫のいい加減さがはっきりしてきた。夫は人のものと自分のものの区別がつかず、いくら借金しても何とも思わなかった。借金はしてはふみたおして職を転々とし、やくざとつきあい、飲みについてはずけにしてるので、不意に暴力団員風の取りたて人や金融業者たちが家にきては、怒鳴りたてていった。夫は

いつも家にはいつかず、毎晩彼女は階段に足音が聞こえるたびにあわてて電灯を消し、息をひそめていた。胸がドキドキと鳴った。それでも何度かはドアを蹴破って踏みこまれたこともある。ただ恐ろしい想いの毎日だった。

結婚するのとほとんど同じ時に、彼女は妊娠していた。母から出産のために送ってもらったお金をかくしておいても、夫は時々帰ってきて、目ざとくみつけては持っていった。そういう嗅覚だけは鋭かった。彼女がそれをいくら糾弾しても、夫は何とも思わず、翌日にはケロッとした顔で同じことをくりかえした。生活は貧乏などというものではなく、まさに赤貧洗うがごときものだった。落ちていた空ビンを集めて売ったお金で、米を一合やと買うというような毎日であった。

義父はいとこがくるようになってからは、わざとみせつけるようにその子を可愛がり、結局は手をつけて、ひとつ家に妻妾同居している状態になっていた。その後、父と母の姪との間には、二人の子供が生まれた。

結婚の翌年、麗子が21歳で子供を出産した直後、母と妹けい子はついに父から追いだされたような格好で家をでて、麗子のところどころがりこんできた。

義父はしかし、けい子をわたさなければ、母の籍は抜かないといひ張ったため、結局、裁判となった。その調停の席にも、母から義父はお前には何もしないでらうから、けい子のためだからでてくれと頼みこまれて、麗子は何度か金沢まででむいた。父からはしかし、皆の面前でさんざんひどい言葉でののしられた。結局、離婚が成立し、父はけい子の親権を失った。やがて、母とけい子は市内の母子寮に移っていった。

その頃、友人の姉が水商売の店を開くことになり、そのスナックで彼女は働いた。水商売は性にあわなかったが、半年ほどで借金を全部返すことができたので、それまでは続けた。他にも多少の余裕があったので、娘香織と二人で、夫には内緒で家をでて、現住所のところに住んだ。そのうちに、夫もどう捜しだしたのか、追いかけるようになってきて、結局、一家で転居した格好になった。

その頃から、夫は夜も寝ないで、目をランランと輝かせていつまでもしゃべっているという状態で、彼女が不審に思っていると、ある明け方、突然、血管が破れたとか変なことを叫びだし錯乱状態に陥った。覚醒剤の注射をやっていたのだった。かけこんだ病院で、その時すでに夫は結核にかかっていたことが判明し、即刻入院となった。

一年後に退院してからは、夫は少し変わったようであった。ようやく腰が落ち着いたようで、タクシー会社に入って、運転手としての仕事をはじめだした。こうして一応は落ち着いた生活がここ二、三年続いている。しかしまだ、麗子には夫が信じられなかった。ああいう性格は一生かかっても治らないのではないかという気がしている。最近では彼女があまり追求しないので浪風は立っていないが、夫はやはり時々、借金したり使いこんだりしては、自分でそれを返している。

来院する三カ月ほど前に三人そろって外出しにでかけた時、麗子は突然心臓が圧迫される感じがして、急に動悸が激しくはやく打ちだすのを覚えた。それから時々、このような状態になり、強い不安に襲われるようになったのだった。

ここには、何ともはや大変なひとりの女の半生のドラマがある。筆者はただ黙って、ひたすらに聴きいるばかりであった。

この段階で筆者の興味をひいたのは、生活上の様々な問題に追われて、実際にはかなり疲弊していたと思われる期間には、あらわれなかった神経症性の諸症状が、むしろ生活が安定してきて、いわばほっと一息ついた段階で出現してきているという点であった。つまり、いわゆる Entlastungssituation (脱負荷状況) において、症状発現がなされているのであり、この点と、彼女が非常にちゃんとしていて、しかも負債を負いたがらないという性格的なあり方、および、停滞した気分状態ということから、筆者は当時、診断論的には、いわゆる「神経症うつ病」または「抑うつ神経症」を考えていた。しかし、これと「不安神経症」とは、病前性格と発病状況の点において、きわめて強い連続性があり、厳密な弁別は、結局のところでは不可能ではないかと思われる。

3. 経過

1) 人間関係における葛藤と閉塞

次に少し、カウンセリング過程を眺めておくことにしよう。翌週に行われた第2回の面接では、さきにあげた生活史的な話題の外には、次のようなことが述べられている。

「何にもしたくなくて、ほとんどじっとしているだけの毎日です。主人が何か一言いだけで、無性に腹が立ったり、イライラしたり、すぐに泣きだしたりしてしまうんです。反抗しては、自己嫌悪に陥るんです。

最近なぜかとくに、金沢のことが思いだされるんです。あれほど嫌で嫌で、け嫌いでいたのが、どうしてなのかと思います。毎日が何か寂しいような、憂うつで、何をしてもつまらなくて、……別に主人との間がしっくりとつかないというわけでもないんですけど……。結局、私の我がままなんです。ひとりで金沢にいつてみたいと思ったところで、娘は学校だし、主人は仕事が忙しいし、いけるわけもないので、ついイライラしてしまうんだと思います。

主人に隠していることは沢山ありますし、私は自分ひとりで考えて、ひとりで勝手に苦しんでいるんです……。主人が3日くらい休みを取ってくれれば、一番いいんですけど、そうもいかないでしょうし……。

ずっと父のところにおいて、20歳になるかならないかで結婚してしまったので、他の世界は何にも知らなくて、これでよかったのかと思うんです。何か大事な忘れものをしてきたような気がしてならないんです。25.6歳の頃までは、そんなこと少しも考えなかったんですけど、もう30前にもなると、あきらめなければ仕様がなとは思いますが。もともと、自由があるみたいで全くなくて、いつも誰かに監視されてきたような人生でしたから、あきらめることには慣れてきましたから……。

三年ほど前にお店で働いた時には、色々な男性をみましたけど、その人たちの誰もが、私のことを子持ちの人妻とは思って

いないようでした。その頃は、だからまだやれる、と思っていたのかもしれませんが。主人と別れてもやっていける、むしろ別れて何かをやってみたいという感じでした。

もしあの時、ああして働いていなかったなら、今頃はきっと本当に主人と別れていたと思います。」

麗子はいつでもやり直せる、離婚してもやっていけるという自信があったからこそ、一緒にいることができたのであろう。ところが、もう30歳ともなれば、もはややり直しはきかない。そのところに実存的空虚が顔をのぞかせる。「夫はこんな人だし、ルーズな性格は一生変わらないだろうし、こういう生活を続けていっていいのだろうか、もっと別の可能性もあったはずなのに、今となってはもうどうすることもできない」、麗子にはそう感じられていた。だからこそ彼女は、もう一度、小さかった昔に戻り、はじめからやり直したい、何か大事な忘れものをしてきたような気がする」と思うのである。

20歳とか30歳、40歳といった年代の替り目は、ことに女性にとっては、そのそれぞれが人生の変節点としての重要な意味を帯びているようである。こうした年代の替り目が、人生上の危機的な意味をも有していることは、様々な精神的、心理的異常の発症が大体、こうした年代の替り目の前後に、それぞれのピークを記していることから明らかとなろう。いわゆる厄年の考え方も、この文脈で捉え直すことができる。女性が数え33歳で厄を迎えるということは、この頃に女性にとって乗り越えねばならないひとつの危機的な臨界期の存していることが示唆されている。男42歳の厄が、初老へと向かう身体的徴候をはじめ、社会的立場や役割の変化という比較的目的立った要因を背景にしてあらわれてくるのに比べれば、この女33歳の厄というのは、おそらくはもっと内的な成熟過程にかかわる心理的危機から由来するものなのではないかと思われる。麗子の場合とはくに、青年期のモラトリアムの中で恋愛関係の試行錯誤を経験することもなしに、いきなり現実的生活人となっている。その結婚も、受身的な形で、しかも義父という男性像の影という、かなり未熟なアニムスに導かれての短絡的な結びつきであった。子供も小学校に入り、現実的生活に余裕ができてきた時、しかも、もうやり直すこともできず、この人とこれからもやっていくのだ、しかし、はたして本当にこれでよいのだろうかという疑問が生じてきたとしても、それほど不思議なことではないであろう。

続く第3回目の面接に、彼女はかなり憂うつそうな表情であられた。筆者がそのことに触れると、「実は、昨日ちょっと嫌なことがあったものですから」と述べて、母親との軋轢の問題が語られだし、結局この回の話題はこの問題に終始した。

「母のことを小さい頃から、かばってやってきたことが馬鹿らしくなってきて……、もう全く勝手なんです。私に妹を義父の家に連れていってくれといったりして、もう何を考えているのか全くわかりません。金沢から電話があって、母はけい子を父のところに遊びにいかせると約束してしまったんです。母にも下心があるみたいで、私はそれが嫌だから、やめてほしいといったんです。子供がある程度大きくなって、自分の判断で向こうへいきたいというのなら、その時にはいかせればいいと思うんです。私のことを全然考えていないみたいだと思ったら、あんたにそんなこといわれる筋合いはない、あんたには関係ないから放っといてくれというんです。私は裁判までして憎みあってできたんだし、そういうみっともないことはやめてほしいといったんですけど、自分の方から下心は多分にあるというんです。お金を送るからとかいわれたらしくて……。私は妹が父に会いに行くこと自体は何とも思ってないんです。ただ母の気持が情なくて……。自分が別れる時には、裁判にでるのは嫌だから、代りにでてくれといって、そんな時には別れさせるために人を使っておきながら、今度は連れていけで、あんまり身勝手だと思うんです。裁判の時も皆の前で父から、“金が目当てなんだろう”とか“お前が陰で糸を引いているんだろう”とか“親子そろって大したものだ”とか“どこの馬の骨ともわからないのを拾ってやったのに恩を仇で返した”とかひどいことをさんざんいわれたんですよ。それでも“妹のためにあんなところにおいておけない”、“妹のために妹のために”ということで、私もそれほどまでならと思って何度も足を運んだんです。

昨日もあんたのためにあの人と一緒にあったのに、それを非難するのはまちがっているというんです。あんたがおかしいとか気遣いだとかいわれると、私の方がおかしいのかと思って……、先生、やっぱり私がおかしいんでしょうか？

主人は、あの人とはちゃんと働いてやっているんだから、放っとけばいいというんですけど、私にはいつでもどこか頭の中にあって、妹も小さいし、肉親だからたち切ることもできませんし、一言でも“あんたには悪いね”といってくれれば、救われるんです。私は小さい時から愛情をかけてもらってないので、少しでもわかりあいたい、愛情をかけてもらいたいという気があるんです。だから“けいちゃんのためになら別れても、私のためには別れてくれなかったじゃないの”といったんです。私は中学の時から何度も泣いて頼んだのに……。母は私がただわがままで神経質で強情だと思っているだけで、どうしてそうなったのかは少しも考えてくれません。そういうことを考えると憂うつで生きていきたくなくなる……というんですか、もう死んじやいたいとかそんなことをすぐに思ってしまうんです、生まれてこなければよかったとか……。母とチビさんが生きてる限り、悩みはずっと続くのではないかと思うと、本当に死んでしまいたいと……。わかってもらいたいんですよ、その歯がゆさがあるんです。昨日も帰りながら、もう絶対にここにはこないでおこうと思ったんですけど……。

つい何かとてつもない行動に走ってしまうのではないかという気がして、そうなると頭がカーッとして割れるように痛くて、心臓がドキドキしてしまって……。今は週一回ここにきて話を聞いてもらうのだけが支えなんです。

主人にも毎日、悪いなと思うんです。最近、気をつかってく

れるんですよ。でも、まだ目は離せないという感じはありますけど……。」

このうらみはよくわかる気がした。目の前にいる母や妹によって、いまわしい過去がいつも現在化されているのだった。

この次の第4回目の面接では、夫に関する不満や葛藤が語られた。症状は依然、断続的に続いていた。彼女はその時々気持をもっと夫に表明するよという示唆を受け容れて、そうしようと努力もしていたし、夫もまた「いきたいが、なかなか機会が握めない」旨の電話をしてきており、その時の「できるだけ彼女の話の聴き、気持を理解してあげるよ」というわれわれの要請に従おうとする姿勢をみせてはいた。しかし、彼女からすれば、いくら話しても夫は決して「ああそれは考えすぎ考えすぎ、気のせい気のせい」というだけで、実際は全く聞いていないのであり、「この人には何をいっても結局、無駄なのだ」ということが、もう頭の中にこびりついてしまっている」ということになる。「そのくせ、こっちが沈んでいて何もしたくなくて、しゃべりたくないような時に限って、“話したいんだろ、さあ話せ、さあ話せ”とか“そんな顔みてるよ”とかあしろうしろとかいうので、段々腹が立ってきて、その前日は大喧嘩になってしまった」という。「昔のことはいうな」として怒るんですけど、あの人は昨日のことも昔のことになってしまうんです」「ああいう性格は治らない、まだまだ信用できない」といいながら、彼女はまた次のようにも述べている。「でも、主人もかなり気をつけていることはわかるんです。以前は間違えとかいっていたのが、この頃では私を怒らせないようにと……、よく我慢してくれていると思います。あんまりいうと、今度は主人の方が参っちゃうんじゃないでしょうか、主人も神経質ですから……、それに喧嘩していくらいっても、すんでから訊いてみると、何もわかってはいないんです。」

筆者は彼女が怒りをぶつけきれないでいることにもどかしさを感じていた。そういう感情をとことんぶつけきってみれば、また新しい地平も開けてくるのではないかと思われた。しかし、その夫はまた「神経質」で、身体に症状化をきたしやすい傾向によって、彼女の攻撃性発露の標的となることをまねかれていた。そこで筆者は、「離婚のことはもう考えないのですか」と訊いてみた。彼女はそれに対して否定とも肯定とも明確な反応は示さなかった。

続く第5回の面接も大体同様であり、夫に対する攻撃

性はうっ積し、むしろ自罰的方向性をとっていた。夫は夏休みは一か月ほど、夫の実家の高山にいてきてはどうかと提案しているが、彼女はそれについても決断できないという。

「閉りの人にふり回されているような、よその奥さんにまで気をつけて気をつけて、疲れてしまっています。どんどん気が滅入って、何もしたくなくなって、もう煩しさから逃げだしたいんです。主人に悪いという気持が強く、高山に送ってもらうことでも労力を使わせて悪いと思うし、私が主人の首に縄をまいて落着かせてしまったような負い目というか、そんなものを感じてしまう。主人が働いてくれているのが、何か私が無理に働かせている感じで、今までお尻叩いて毎日乗ってくれなきゃ困るといつてきたのが、この頃は毎日乗ってくれているんですから、以前働いていないだけに、今は働いてもらっているのだという感じがして、昼間、夫が働いているうちはクーラーでもかけないんです。ところが、夫が昼に帰ってきて、どうしてかけないんだといわれると、“いいでしょ、私の勝手でしょ”といってしまう。私も素直になれないんです。ひとりで気をもんでいるだけで相手にはちっとも伝わらない。甘えられる人じゃないし、むこうが甘えているような感じだから、相談にはならないし、常に話をする機会がないんです。」

この時期、彼女は夫とも母親とも娘とも、あるいは近隣の主婦たちとも、すべての人間関係の葛藤の中に閉塞し、どこにも抜け道をみいだせないでいた。

7月下旬に行われた次の面接では、主に一人娘香織のことについて言及されている。症状は一進一退で、気分もよかったりよくなかったり、ちょっとしたことで心悸昂進が起こったり、体中が熱くなったり冷や汗が出たりする状態が続いていた。

「香織にあんまりあしちゃう駄目、こうしちゃう駄目というもんですから、よその奥さんは異常ではないかという。私が駄目だということで、あの子も嘘をつくんです。私の中には極端に他人に迷惑をかけたくない、手も借りたくないという面が強いんです。夫がいつも人に迷惑をかけているので余計、そうなるんでしょうけど、今日でも隣の奥さんが、香織をみてあげるといわれたのに、あずけられないんです。あの子は恥かしがり屋で集団の中にもなかなか入れなくて、近所の子が遊びにきてもでていかない。嫌いなものは嫌いという感じで、段々私に似てきているみたいです。皆、結局は私が悪いんだなって思うんです。だから子供と一日つきあっていると、責任を感じてすごく疲れてしまうんです。」

主人は、だから香織は高山において、自分だけ少し金沢に帰ってきたらいいと気をつけてくれるんですけど、そんなふうにして私が望まないことをおしつけて、望むことはやってくれない。そういうように気をつけてくれるだけに気が重いんです。

娘は父親似で、顔もきつくてよく男の子に間違われるんですけど、少しも女らしくなくて、行動も父親をまねるので言葉づかいやしぐさもそっくりで、性格も夫に似ているのかもしれない。主人はもうひとり子供がほしいというんですけど、こう

いう状態の中では生みたくありませんし……。この頃ではあの人と一緒に話し合いたいと考えない方がいいと思うようになってきました。夫は私にかまいたくないという感じで、逃げよう逃げようとしている姿勢がみえるんです。」

この回のあとで、彼女を迎えにきた夫とはじめて面接した。彼は中背の痩身、角刈りにサングラス、服装も態度も言葉もかなりくだけて、いかにも無責任で調子のいい感じであるが、その中でも慣れ慣れしげな人なつこさがあった。「口ではどうしてもあれにはかなわんからねえ、どっちかといえば、まだ自分の方が我慢しとる感じ、以前は僕のいいなりだったね、今でもおっ母というより、僕に兄ちゃん兄ちゃんという感じでね、もう僕自身が蒸発したいなと思うこともあるもんね、まあ、かなわんわねえ」と彼は語った。

この回から次の回の面接までには、一カ月半の間隔があった。治療契約では毎週一回一時間と決めてあったが、時としてインタバルは彼女のペースで選ばれた。筆者としては中断かと思っていたところ、9月半ばに彼女はあらわれた。7月下旬から8月中旬にかけて、彼女は子供と高山にでかけていたのだった。

「向こうにいつている間はよかった。義母には多少気もつかいましたが、気分的に楽で煩わされるものはありませんでした。こっちに帰ってきた時には、人から明るくなったといわれました。娘ものびのびして、私も夫から解放されてのんびりできました。その間に、気持よく金沢にもいかせてもらえて、お友達が家を建てたので、そこへいきました。私は、母と二人で暮らしていたあたりをあちこち歩いてみたかったですけど、その家から一歩もでずじまいでした。

こっちへ帰ってきたとたん、お部屋も狭いし、またここで生活するのかという圧迫感もありましたが、今は少し慣れた感じがします。お友達が家を建てたのに刺激されて、主人ともお互いにお金をためましょねと話しあって、目的のようなものができました。それで、親しくしている奥さんに誘われて、パートで食品製造のアルバイトにでることにしました。」

2) 夫との対決と症状の悪化

9月下旬の第8回面接には、はじめから夫が同伴していたので、この回は同席面接の形がとられた。二人は並んで掛けたが、服装といい態度といい言葉といい、その二人が一对のカップルであるというのには、あまりにもチグハグなものが多かった。夫の方がくずれた姿勢をすればするほど、彼女は背すじを伸ばして座り直し、キチンと話そうとした。そこには拮抗した緊張関係があった。

この中で彼女は、普段にも増して激しい調子で、猛然と夫への非難を治療者に向けて語った。治療者としては、中立的な立場で、二人を正面から冷静に対決させたいと

思っていた。

夫：帰ってきた当時はよかったけど、また元通りみたい。やっぱりやること多いもんだから――。

麗子：そんなことではなくて、人間関係ですね、主人との。毎日お腹のさぐり合いみたいな、そういうことが耐えられないんです。

夫：自分には甘えるところがないというけど、僕もまあ、フワフワしているもんだから……。仕事のこととか色々あるので、面倒くさくなっちゃうわけ。それで段々、不満がたまってきたらう。

麗子：今現在では、お金のことなんですけど、借りたのを払っとくって、払ってないんですね。段々、不信感というか、腹が立ってくるんです。私はいつも、しっかりしなくちゃ、しっかりしなくちゃと思って、気をゆるめると、また何かをやるんじゃないかという不安とか疑問があるんです。この人に対するそういう疑惑がつのってくと、イライラしてしまうんです。甘えたいんだけど、そんなことは全然できない。むしろ甘えられている。どっかりと重荷をすえられたようで、この点は結婚以来、ずっと何の進歩もしていない。そういうことがたまらなく嫌なんです。この人に関しては、信用度ゼロなんです。お金のルーズだということは、結局人間がルーズだということになると思うんです。そういうと、「わかったわかった、三日以内に返すから」とかいっても、そのままズルズルと一カ月が過ぎてしまう。私がいくら話しても、のんびり構えているので、腹が立ってきて、大体あなたの性格はどうかこうとか話が違ふ方へいってしまう。いつもそれでごまかされているみたいで、のらりくらりとして、私は妻の前では見栄をはらなくてもいいじゃないというんです。私がいくら興奮して泣きわめいても、この人は何んもいわないので、段々寂しくなって、常に一定の距離があるように感じるんです。かんじんなところとかみあっていない。気はつかって来てると思うんですけど、それはかえって、マイナスだと思うんですよね。

夫：まあ、自分はいつも何とかなるさというあやふやな性格だし、遊んだ金のことなんか訊かれないしね、訊かれれば訊かれるほど、余計いいたくなっちゃって……。

麗子：いってほしいことはいわなくて、いってもらいたくないことばかりいうんです。お客がないから、もう今日はやめたとか、人を不安にさせるようなことばかりいって、自分の仕事にプライドを持ってないんです。

それに、私には子供が1年生になったことが、とても重く感じられるんです。子供は両親をみて育つでしょ。父親としてのしっかりしたものが無いというんでしょうか。台風がきても、そこにいれば大丈夫だという抱擁力があれば、安心なんです。ところが、この人がそういうふうでドーンとしてくれないから、子供も不安定になっている。だから、私が頑張らなくちゃと思うんですけど、私はもうこれ以上、我を張って生きていくということが耐えられないんですね。そういうことだけで疲れてしまって、もうお掃除もお洗濯もしたくなくなるんです。

この同席面接から次の面接までの間には、約一カ月のインタバルがおかれた。彼女はその日、流行風の大き

なサングラスをかけてあらわれた。「一昨日、急に目がかすんで見えなくなってしまった、突然だったので、うろたえて、体中がふるえて怖くて怖くて仕方がなかった、痛くて痛くて、涙がでて目があいてられない状態だった、眼科では神経からきているといわれたが、まだ痛いので、不安で参ってしまっている、自分がおかしくなってしまうのではないかと、背中がこって、吐き気もして仕様がないう」ということであつた。いわゆるヒステリー性の視覚障害かと思われたが、直接の契機などはとくに確認できなかった。筆者があまり気にすることはないというと、彼女は続けて次のようなことを述べた。

「先々週の日曜日に母がひょっこりときて、前に喧嘩したことには一切触れなくて、何となく用事できたという感じでした。そのことに触れないので、何となく寂しくて何かがかかりたという感じで、自分だけが考えて神経すり減らしているみたいで馬鹿だなと思うんですけど、それでも考えちゃうんです。

心臓のドキドキもまだありますし、ますます痩せていく感じなんです。誰も頼る人がいなくて、心からどっかりと安心していられるってふうではないものですから……。

この前、夫と一緒にきて、あんなにボロクソにいて悪かったなという後悔が今でも残っているんです。ますます夫との間に溝ができたのではと思って、最近また憂うつ病がはじまった感じで、色々考えごととして不安でいっぱいになって、ひとりではいられなくなるんです。」

夫に対する攻撃性はしかし、やはりすぐに後悔に転じ、内攻して抑うつ感を形成していた。続く第10回面接でも、アルバイト先に同じ病院から外動作業療法にきている患者たちが叱られているのを見て、「あの人たちはとても心のきれいな人たちなのに、他の人たちはどうしてあんないい方をしなければいけないのかと思って腹が立ったんです、いずれは自分もああなって、あんなふうにいわれるのかと思うと、人ごととは思われなくて」と同情的になったり、いわゆる精神病恐怖的な不安が語られたりした。その次の第11回面接（10月末）では、次のように述べられている。

「また、夫と大喧嘩しました。大分前にわたしたお金のこと、手紙がきて使いこんでいたことがわかり、愕然となってやっぱり一緒にはやっていけないと思ったんです。ただ使いこんでいたのが春頃のことなので、今さらいっても仕方がないし、自分で何とかするということで、そこまでいうのなら任せておけばいいと思うことにしたのですが……。

最近、よくなっているのかどうかかわからない。今はここにきたくない感じが強くて、希望がないというのか、少しでも目にみえてよくなってほしいんですけど……。最近是最悪って感じです。喧嘩するとカッとになって、いってはいけないことまでいってしまう。お前の考えはおかしいといわれると、やはり

おかしいのかと思えてきて、自分で自分を病気にしてしまっているんです。自己嫌悪というのか、夫がそういうことをしたことによって、また元に戻ってしまったような、情ないというか、あの時はもう本当に死んでしまいたいという感じでした。何も想い残すこともないし、体も健康ではないし、連れ添っていく人はこんな人だし、そうかといって別れてやっていく自信もないし……。

喧嘩していても、大嫌いな父を思い出してしまうんです。男だからというだけで、ただ憎悪で、夫だか父だかわからなくなってきて、ワァッとなってしまふ。その時はもう夫ではなくて、私は泣きだして、小さい時から何も自分は悪いことしていないのに、ああだったこうだったということになってしまう。結局、私は愛情がほしいというようなことをいうんです。」

この時の彼女の「少しもよくなっていない、最悪の状態」という治療者への間接的な非難に対して、筆者はこれは心理療法の展開の中での一段階であつて、苦しくともここを乗り切らねばならない」と応えたが、それで彼女を納得させることはできず、彼女の不安発作や身体的症状はますます強いものとなっていった。第12回面接では次のように述べられている。すなわち、「四日前には心臓がいつもに増して激しくドキドキとなって、立ってはいられなかった、一昨日はよかったが、昨日からなりだして、一旦は治まったが、今朝からまた起こって、ずっと今でも続いている、のべつこんなふうになって、死んでしまうのではないかと、不安で不安でこのまま自分がおかしくなってしまうように思える、心配でたまらないので、仕事にしようとする夫も引きとめてしまふ、反面、悪いなと思って余計にイライラしてしまう」というのであつた。

この時、治療者はそれ以上、彼女の話聞くのはやめ、ごく軽い感じで受け流しながら、しかし断定的に「一日中続いたとしても、それはよくあることで少しも心配する必要はなく、それで死んでしまうようなことも絶対はないこと、必ず治るので、安心してそっとしておくこと、ただし特定の姿勢をとることによって治ることが多いので、無理のない範囲で動くこと」を伝えた。この心悸昇進が長く続いた状態では、心臓自体は非常に速く打っていても、実際には血液がその動きについていけず、身体の各部は貧血状態となっているので、実際、集中した対話は困難であつたし、こういう時期には、たとえ非論理的であれ暗示的であれ、専門家の口から明瞭に支持され保証されることは、患者が安心できることにとって有効な手段となるからであつた。

次の面接に、彼女は別人のように生き生きとした表情であられ、「先週、先生にあいわれた後、嘘のようにピタッと心臓のドキドキがなくなってしまったんです、本当に先生のおっしゃった通りで、有難うございました」

と述べた。治療者には、心理療法過程が確実に一步前進したと思われた。

3) 治療転機

前回から次の面接までの二週間の間、筆者には予想だにしない大変な事が起こっていた。麗子の母親が、自転車に乗って横断歩道をわたっている時に、車にはねられ即死したのだった。すでに葬儀も終わり、小学校4年生になる麗子の妹、けい子も麗子の許に引き取られていた。このことは金沢の父には、あえて知らせなかったという。11月半ばの第14回面接では次のように語られている。

「私の気持としては、非常に複雑というのが本当のところですよ。けい子は自分があれほど憎んでいた人の子供だということもあるし、あの子と一緒に暮したこともないので、妹という実感がないんです。可愛想だと思う反面、またあの父のことでこれから振り回されるのかと思うと、もう嫌です、それに自分がこんな状態で育てていく自信がないんです。夫は向こうへやることはできない、可愛想だし、こっちにおいておけば、これからはついてくるというんですけど、周りがいくらいって来ても、私の気持が固まらないことには……。ただ、あの子は全然なついてはいないし、私がそんな気持でいれば、子供は敏感ですから、余計なつかないと思うんです。」

〈返してしまいたいという気持もあるのですか？〉

「返したいとは思わないんです。向こうは再婚して子供もいますし、そんなところへやれるかという気はあります。だから余計腹立たいんです。またしても父の子に何で振り回されなきゃならないのかという気持で、正直なところ避けて通りたい気分です。“またしても”という感じで、やっと少しずつよくなっていく感じがしていたところなので嫌になってきます。けい子も母ひとりで育ててきたので、母が急に亡くなって倒れるくらいにショックじゃないかと思っていたら、ケロッとしてキャッキョッと遊んでいるので、その点でも複雑な感じで、母が亡くなったただけだったら、スッキリして自由な気分になれたのかもかもしれませんけど、けい子が引っかかってくるので重いものに想えてしょうがないんです。母と夫に対していつも人が悪いんだということにして、本当は自分の理解が足りなかったのではないかと思えてきます。夫もこれをいい機会にタクシーをやめてでなおそうかと真剣に考えているみたいです。」

〈それならむしろ、積極的にけい子ちゃんを引き受けていってはどうなのでしょう？〉

「実は、母のことでかなり多額の賠償金がでるんです。そのお金のためにけい子を引き取るのではないかと人に思われるのが嫌で、そのこだわりがあったんです。でも、本当は先生のおっしゃったようにしようと、内心では思っていたんです。」

翌週の面接にあらわれた麗子の表情は、いつになく明るかった。

「以前の症状が全くないんです。先日、内科で診てもらった

ら、私、結核なんだそうです。以前なら、少しそんなことがあれば、しょげかえってしまっていたのに、今では、あらそうですかなんていってられるんです。

心配なのは、やはり夫のことで、母が亡くなっても、夫は全然変わってなくて、また競馬もやっているようですし、この間はお金が入ったら、外車のすごいのを買おうとかいうので、私は不謹慎だといって怒ったんです。もう夫には期待をかけないでおこうという感じです。この人はどんなになっても、こういう人なんだということがわかってきました。つまらないですけどね、頼りないし、今もう身寄りはないし、夫はそういうふうだし、私が何とかしなくちゃという感じです。

けい子や娘のことについては、今全く煩わしさはありません。けい子も段々可愛いようになってくるというのか、今までは母の壁があって、なかなか入っていきなかったんですけど、亡くなってみれば、やはり妹だし、妹というより今では子供が二人になったんだって素直に思えます。けい子ものびのびと楽しそうにやっていますし、怒る時も娘と同じようにビシッとやっています。あの子の子供だという気がなくなってきました。取りにきても絶対わたすのかという気持です。

たまに足元がフワットなったり、気分が悪くなりかけても、その時点で、“大丈夫だ”と抑えられるようになりました。以前だと、あ駄目だと思うと、それだけで冷や汗がでて、心臓がドキドキしてしまっていました。父に対するこだわりも、母が亡くなったことによって、なくなったみたいです。今までは、いつも母を通して思い起こされていたという感じでしたから。夫のことなどまだ不安はありますが、自分で立ち向かっていくだけの心構えができてきたように思います。

翌週の第16回面接では、「今頃になって、母のことで悲しみがでてきて、自分を責めてしまう、夜ずっと泣いてばかりいるので気分もすぐれない、睡眠も浅く、夢ばかりみている」ということであつたが、その次の面接（12月下旬）では、次のように語られている。

「夫に母の夢をみたとか色々話しても、まるで反応がないので、やっぱり話しても無駄だという気持になっています。」

このところ、ずっと母のことばかり思っていました。特に寝る前になると思いだされて、死んでしまったことが悔しいというのか、もっと年を取っていれば、あんなふうに横断歩道ではねられて逝ってしまうとしても、まだわかるんですけど、まだ40代だったんです。夏以来、母と喧嘩したままだだったので、後悔が残るんです。加害者の人が殺したというより、父が放りだして殺したんだという気がして、父が憎くて憎くて、いとこと子供もできてぬくぬくとやっているのかと思うと、母も妹も私も三人がずっと苦しめられてきたという気がぬぐい去れないんです。

最近まで、ヒョコッと母が訪れてきたり、声が聞こえてきそうな気がしていたんですけど、一カ月たって、ようやく母の亡くなったことが現実なんだと感じられてきて、悲しくて毎晩泣いていました。あの時、もっと母を理解してあげればよかったとか、どうして今までひとりの女としてみてあげなかったのかとか、悲しくて悔しくて、負い目というんでしょうか、今まで張りつめていたものが崩れて、私の方がガクッときた感じですよ。

この三日間は風邪で床に就いていましたけど、夏の時だったら、もっとひどくてたと思うんです。案外、ちょっと寝ただけですんでしまって、気を強く持ってられたので少しは強くなっているのかなと思うんですけど……、お友達は目に見えて変わった、明るくなったというんです。最近はずっと辛くないで、思ったことを夫にも子供にもどんでん返してしまおうというんです。そうするとスッキリしてケロッとしちゃう。母が亡くなったのを機会にそういうふうにいえるようになりましたね。ただこっちが黙っていると、夫はきいてくれないので遠慮しないでいおうと思うんです。〈なかなかいいじゃないですか。〉

「今では、母から解放されたという気はありますね。いつも母の不幸な姿ばかりみていましたから、私が何とかしてあげなくちゃと思って、御亭主はあんな人だし、お小遣いもあげられないし、そうしたことから解放された気持ちはあります。嫌らしいことですけど。

夫はまあ単純な人ですけど、気のいい人ですから、けい子も引き取れたし……、母も祖母も40代で亡くなって、父や祖父は女グセの悪い人でしたから、私も主人と何度も別れようと思いましたが、もし別れていたら、きっとやはり同じような道を歩いていたのだと思いますけど、辛抱強く待ったかがあったのではないかと思います。」

こうして、母親に対する過去の態度についての後悔とともに、麗子の心の中には最終的な母親像が結晶化し、定位されていった。夫に対しても、それなりに受け容れていこうとする姿勢がみられ、三代にわたる男や女の生きざまについての述懐の中で、彼女の生きようとしている方向性が、夫と二人でやっていくのだということとして、今ははっきりと選び取られていることが明らかにされた。こうした傾向は、年が明けた翌年1月の面接においても、さらに深められていった。すなわち、彼女は次のように述べている。

「調子がよくて、前のような気持には、少しもなりません。すごく食欲もあって、少し肥えてきました。最近、自分自身を表現できるようになったみたいです。以前は自分をみせまいとするガードが厚かったんですね。身を固くまもって、強い女みたいにみられていたんですけど、実際は我をはって無理矢理耐えていただけだったんです。近頃ではそういうのが馬鹿馬鹿しくなって、疲れたら疲れたと寝ころんだり、御近所の奥さんとのつきあいも体がえらければ断ってしまって……。前はどんでん相手にひきずり回されて、後でドッと疲れてしまっていたんです。それでもつい、人に合わせて無理をしようとする時もありますけど、主人もその辺がわかるようになったみたいで、“自分を隠そうとしているね”とかいわれると、ああそうだなと思って、自分で調整できるようになってきました。

子供がまた増えたので、頑張らなくちゃとか、アパートも何とかしなくちゃと思ったり、前が開けてきた面もあるかもしれませんが、主人も明るくなったといいますし、子供も喜んでいきます。確かにパッと明るくなったという気持ちはあります。自分の範囲というものがわかってきて、ここまでは自分でやって、あとは主人に任せて、あなたやりなさいねとボンというんです。

前は何でもかでも自分がやらなきゃと肩を張っていたんですけど、“あなたは駄目ね”という、単純な人ですから怒りますけど、後で一言謝ったりできるようになったんです。そうするとニコニコして、上手にあやつっていけばいいんだという自信みたいなものができました。以前は人前では完璧でないといけなかったんですけど、最近をよくとちったりするんですよ。図々しくなってきたんですね(笑)。」

4) 心の故郷への回帰と新たな出発

彼女はその後、同様に良好な経過のうちにあった。筆者は発症時の問題に関連した事柄について訊いてみた。

〈もうすぐ30歳になるということについて、今は?〉

「今は、別に焦りとか今のうちに何とかしなくちゃとか、主人と別れなければ、とかはほとんど感じません。

父のことも不思議と気にならなくなりました。けい子がいるから思いだしてもよさそうなものですけど、本当に不思議に前ほどのこだわりがなくなりました。

金沢にまた一度行ってみたいと思っているんです。もう少ししたら、名古屋を離れて京都に移って出直そうかと主人とも話しているんですけど、金沢という小京都みたいなところにおりましたし、この名古屋には根を下ろしたくないという気持が強いんです。嫌な思い出ばかりですし、この間もけい子が、どうしてパパやママは人の足音がすると、ビクッとして耳を澄ますのといったんだそうです。私としては、父がいなければ、金沢で暮らしたいと思うんですけど、この頃はとくに無性にいきたくなくなるんです。毎年ですけど、雪が降るといきたくなくて、私の場合、とくに自分の故郷であってないような、自由に帰れないので余計、そうなのかもしれませんけど。」

〈すると、その気持は以前の時のとは?〉

「前いていた気持とは、ちょっと違うみたいですね。なつかしいというか、この前、雪が降った時に子供と一緒に、雪投げしたり、キャアキャアって、はしゃぎまわったりして、童心に帰ってすごく楽しかったんです。金沢というと、やっぱり雪しか思いださないんですね。それで、冬になるとどうしてもいきたくなくなってしまおうんです。主人はそういうロマンティックな気持でいきたいということがわからないみたいですね。何でそんなにいききたいのかわからないから、春になってからいけばいいじゃないとか、雪なんかみたって仕様がなくていいんですけど、とうていロマンティックな人じゃないんですね。私は春になっていきたくて思わないんです。母と8歳まで一緒に住んでいたところには、今も全然変わっていないあたりもあるもんですから、いつもそっちの方へいくんです。父といた方には全くいきたくありませんし、考えもしません。自分が母と一緒に歩いた道とか、そんなところが特になつかしくて、何十分も佇んでいたり……。以前は夫から逃げだしたくて、そこに帰れば何かあるんじゃないかというやり直すことを求めていたみたいですけど、今はそれより四人で一から土地をかわって出直そうという感じですから、そういうことはありません。

けい子のごとく、嫌な思いをすることもありませんし、そういう点でも恵まれていると思います。ただ主人のことですけど、私も小学校4年の時には、すでに父をひとりの男としてみてま

したから、私自身、経験のあることなんですけど、私も父の目が嫌でしたね。どんなに優しい言葉でも、目の色が違っていましたから。私も主人のけい子に対する目と香織に対する目つきが違っていることはわかるんです。主人もけい子の目が白々しいので、心配だから何とかいってこれというんですが、私は両方の気持ちがわかるもんですから、主人にもけい子にもそこまで要求はできないと思うんです。だからもうなりゆきまかせです。いっても無理だと思うし、そんなこと一々気にしていたら疲れちゃいますから。」

次の2月下旬の第20回面接は、「今週の終わりに金沢にいったよーかと思っっています」という話題からはじめられた。

「自分の我がままかと思っていいだすのを我慢していたんですけど、この前、主人に話したら、快く行ってこいといってくれましたので、今度はホテルに泊って、個人的にいろいろ思うんです。何となくひとりになってみたいという気持ちが強いもんですから。」

香織とけい子のことが心配でしたが、あちを立ればこっちが立たずで、二人のタイミングが合わずに、いがみあつたり、ののしりあつたりするんです。身の上相談みたいで先生には申し訳ないんですけど、主人にはこういう難しい話ができないもんですから、私が問題をだしても、ああそうねというように納得できる回答は返ってきませんし、心理的に大事な相談はできないんです。それで私の方がヒステリーおこして主人も怒ってしまう。夫婦の結びつきって、そこが一番大事だと思うんですね。それができないから、結局、どうしても私が主人にあわせてしまうので、本当に疲れるんです。だから時にワーッと泣いて訴えるんですけど、一週間もすると元のもくあみで、ただ、最近では私が冷静なんだという気がします。本当にここに通ったかいかがあったと思います。」

ところが、次回面接までの間の3月上旬に、金沢の義父がこの間の事情を知り、ひどく怒って子供を返せと談判にきたのであった。しかし、けい子の後見人は麗子であるため、父がけい子を無理に連れていくことはできず、裁判所からは、父が裁判を起せば起こせるが、向こうが何かいってくるまで放っておくようにといわれている。このため、彼女はまた心臓の圧迫感、息切れ、頭痛、下痢、肩こり等々の身体的失調状態に陥っていた。

3月中旬の面接では、次のように述べられている。

「やはりけい子と毎日、顔を合わせているので、辛くて憂うつでやりきれなくなってしまう。前ほどひどくはないんですけど。父が親として会いにこられれば、拒むことはできず、一生つきあっていかなければならないのかと思うと、せっかく四人で新しくつくっていろいろしていたものが、またしても壊されてしまったという感じで、今度のことは夫婦間のことでもないので、余計どう考えたらいいのかわからなくて、自分で焦

っちゃっているようで……、主人にもこれ以上、心配かけられないし、父がいつまたいってくるかという毎日、ヒヤヒヤしているのがたまらないんです。こんなことなら、無責任なようですけど、子供を返しちゃってもいいという気持と、むこうにも妻子があるし、それはいけないう気持とその二つが戦ってるんです。主人も私もイライラしているので、言葉を交わすと喧嘩になってしまって、主人のことは性格的には飲み込んだんですけど、こういう問題がでてくると、まだ主人にも安心できなくて、交渉問題でもきいているとイライラしてきて、全面的に任せておけないんです。自分がしっかりしなくちゃ、しっかりしなくちゃとひとりで考え込んでいて、最近私の本当の気持ということでは話してないんです。私の気持はだしちゃいけない、そこまで面倒はかけられない、となってしまうんです。」

〈しかし、この問題は全面的に御主人に任せてしまっては？〉

「今までそんなこと考えてもみませんでした。後見人は私なので、裁判になったら、私がやらなきゃならない、自分のことだから自分で解決しなくてはと思っていましたけど、そうしましょうか。ひとりで考え込んでいると、つい子供にもギャング怒っちゃうし、私だと感情的になってしまいますけど、父も主人とは穏やかに話しますから。ああ、そうですね。任せてみます。今の今までそう思わなかったの、主人が何をいっても、何いってるの、人ごとだと思って、と内心では思っていたんです。」

筆者としては、上の示唆はごく何げなくつい口にてたという感じであったが、彼女は驚いたような顔をして、上のように反応した。この次に行われた3月下旬の面接では、「本当に先生のおかげで先週末、不思議なくらいパツパツとよくなってしまいました、何故こんなに気分がいいのかわからないくらい楽になりました、あの人もまだ不安はありますが、できる限り任せるように務めようとしています、身体の方は、全部全く感じなくなりました」と述べられた。4月上旬の第23回面接では、次のように語られている。

「気分はずごく楽です。子供のことで、こういうことがあって、ますます団結するというんですか、子供たちもくっついてくるようで、かえってとてもいい結果になったようです。香織もお姉さんができて、とても明るく、活発になりました。家中のすべてがトントン拍子によくなっています。風邪をひいて四日くらいになりますけど、寝込む気にならないんですね。気持はずんでいると、病気も飛んでっちゃうよう。この間、ひとりで家にいる時に、今、向こうからきたらどうしようかと少し不安に思いましたが、すぐに、ああ、それならそれでいいわと思いました。向こうも私にはいいたいことをいうし、私にも永年のうらみつらみがありますから、こうやってお話をしているように、一対一で切々と訴えれば、感じてくれないはずはないと思うんです。主人や回りに人がいるところでワイワイやっているの、むこうもこっちも意地になりますし、話を聞こうともしないで、ただ“お前やお前の母親は俺を憎んでいるん

だ、憎んでいるんだ”としかいわない。何故そうなったのかということを考えないんです。私も十何年、父娘という間柄だったんですから、話してわからないことはないんじゃないかと思えます。それで私達にけい子を任せてくれれば、向こうから年に何度か会いにもきてもらいたいと思えますし、だから私ひとりで向こうへ話にいつてきても、かまわないと思っているんです。」

〈随分強くなりましたね。〉

「やっぱり嫌い嫌いではいけないと思うんですね。けい子には父親ですから、避けてばかりではいけないと思います。私にも父親というものへの憧れがありますから、けい子が大きくなった時に会いにいけるようにしてやりたいと思うんです。実際には、話し合っても、わかってもらえるかどうかはわかりませんが、裁判のことは主人に任せようと思うんです。それはそれとして、人間の触れあいというか、人間関係の態度によって、私自身こういう病気になるのだと思いますから、そういう心の交流というか、そうした形で接したいと思うんです。以前は父を人間としてより動物としてしかみられなかったんです。この頃では同情というのか、この前、会った時もぶつかりましたけど、ああ年取ったなとか、ちょっとひどいこといい過ぎたかなといった感じも抱いたんです。」

以前はお友だちとか御近所の方や主人のいったことをそのまま受けとめて、シュンとなっていたんですけど、この頃は、ああそういう考え方をする人もいるんだなと思って、“あなたって変わった考え方するのねえ”なんていえるようにもなりましたし、テレビみても心底から、ワハハと笑えるようになりました。

夫とは父にない優しさがあるということで結婚しましたが、すぐに優しさとか粗暴とかは表面的なだけの違いで、根本的には男というものはどの人も同じだと思うようになったんです。結婚してしまえば、女中のようにして、昼間はお金のことでひどい仕打ちをしていても、夜になるとコロッと態度が変わって求めてくるという二重の面があるのがすごく嫌で、そんなことから結婚後三、四年くらいからセックスができなくなったんです。夜になると人が変わったように優しくなったりして、男の本能をマザマザとみせつけられるようで、一時は夜になるのが怖くて怖くて仕方ありませんでした。でも近頃では心理的に受け容れてもいいという気になってきています。この人についていくんだという感じが少しずつ強くなってきているんです。」

こうして、はじめの主訴はすべて消失したため、面接はこの回で一応終結にすることにし、また問題が起こった時にはその都度、相談にのることとされたが、この直後に父親が提訴してきたのであった。その後、何回か行なわれた調停も平行線のまま、この問題は一年以上経過してもなお結着はつかなかった。調停の前後などには彼女も多少不安になったり、けい子に対する二重の感情が吐露されたりもしたが、症状の再発はもはやみられなかった。しばらくおいて、面接開始からちょうど丸一年たった6月の末に行われた面接では、夫との間に関して次のように述べられている。

「主人は割と穏やかになりましたし、こっちのいってることも理解してくれるようになりました。ですから、このところずっと感情の昂ぶりとかはないんです。その分、主人は少し痩せたみたいですけど、気をつかってるんだなと思います。これまで八年間の永い日々でしたから、この一年で一步だけでも前進できたということが本当にうれしいんです。こんなふうにあんまり良くなってこれると、かえって困っちゃうというのか怖い感じがして、そんなに急ではなくて、これからの八年で一步一步返してくれればいいと思うんです。」

8月には旅行しようと計画を立てたんですね。子供たちが高山にいきますので、その間に二人で金沢へいこうと思ったんです。今までは人にみられたくないというか、ひとりで楽しんでたんですけど、金沢には幼稚園から小学校1・2年までの間、母と二人でいて育った家もまだありますし、どういうところで遊んだんだとか、そういうものが何ものにもかえられない自分だけの財産のように胸に大事にしまっておきたいと思っていたんですね。ところが、それがどうしてかわからないんですけど、主人にみせたいという気になったんです。私たちは新婚旅行をしませんから、それを私たちの新婚旅行にしようとして話し合っているんです。主人と二人で旅行するのははじめてですから、そういうことを考えると浮き浮きしちゃって。

主人も前は自分で勝手にでいて、楽しんでくる人だったんですけど、この頃では私と一緒に考えてくれるようになってきているんです。お互いにひとりで何をやるということが、段々なくなってきたというんでしょうか。その分、口もうるさくなりましたけど。」

その後はごく不定期に数回の面接が行われた。その話題は、主にけい子をめぐる育児上の問題であったが、それ自体はもはや、どこ家庭にもありうるような事柄であり、神経症性の諸症状には無縁のことであった。こうしてついに、約二年にわたった30数回の面接は終えられることになった。裁判の結果については寡聞にして、今となっては知るすべもない。

Ⅲ 考 察

この症例からは、その接近の視座に応じてごく様々な示唆が与えられうると思われるが、ここでは筆者なりの視点から得られた二、三の所感について述べておくことにしたい。

人間が人間であるのは、まさに「人間」、人との間においてでしかありえないが、こうして人の中で人間であるということはまた、いかにやっかいなことであるのか。人は真空のうちから忽然と出て来たるものではなくて、連綿とうち続く人類の歴史においてくりかえされるライフ・サイクルの中で、宿命というのか業というべきか、そうした個々人の意志を超えた限定をすでにになわされて世界へと出て来っている。しかしまた、われわれはそこからいかにして自由でありうるのか。われわれはすでにそのような限定のもとにありながら、また他方でいかに

して自らの意志によってそれを把握し直し、将来への方向性を自ら選択することができるのか。そこにいわゆる「被投的投企」をなす唯一の存在者として人間だけに与えられた可能性と規定性がある。そして、このことに「心理療法」はいかに関与しうることになるのであろうか。

しかしながら、「癒す」のは、ヒポクラテスの古来からいわれてきたように、われわれ心理療法家なのではない。それもまた、われわれひとりひとりの個人的な意図や能力を超えた大なる意志のなせる技によるところが大である。われわれはただ、その大いなる力が最も有効に働きうるようになる状態を準備することにかかわり、それとともに待つことができるだけである。

麗子がそのいまわしい過去を清算し、新たなる出で立ちの歩みをはじめめる転機となったのは、明らかに母親の死であった。それはあたかも、母親が麗子への最期の愛の証しとして、麗子を取りまくすべての不幸を一身に背負って逝ったかのようにさえある。麗子ははからずも面接の初期に「母とチビさんが生きている限り、悩みはずっと続くのではないかと思うと、本当に死んでしまいたい」と述べていた。母親は麗子にとって、そのすべての過去の収斂する核であった。突然、その母親の死が現実のものとなった時、この核は解体し、それによって義父についてのこだわりも「不思議に」うすらいでいくことになる。その呪縛から解放されて、妹も、そして何より夫も、ありのままの彼ら自身の姿が麗子にみえてくるようになった。こうして麗子は、彼らとの現実的な関係のうちにはじめて入ることが可能となったのであった。それまでの夫像は、義父のイメージの重ねられたものに他ならなかったものであり、そのようにして否定的な感情を持って眺める麗子から、当然のこととして夫も距離をとり、依然「並はずれて甘やかされた長男」としての過去に縛られたまま、放蕩、乱行の限りを尽していた。その結果、麗子はますます、生来の勝気さで何としても自分がきちんと肩をはり、頑張ってきたのであった。ところが、夫もある程度、落ち着き、生活も安定してきた頃、このままこうしてこの夫とただ年老いていくだけでいいのだろうかという懐疑のすきま風が、彼女の胸の中を通りぬけるようになる。しかし、もうやり直すことができるほど若くはない。こうして神経症症状が発現してきたのであった。すでに少しふれたように、男にとって、その仕事や家族や人生を真に引き受けていこうとする最終的な覚悟が40歳前後になされるとするならば、女性のそれはそれよりも十年程早く訪れるのではないだろうか。

心理療法の当初から、麗子はしかし、その最も深いところでは「結局、自分はこの人とやっていくしかないの

ではないか、それでいいのだ」ということを確認し、納得したかったのであろう。ところが、治療者には最初のうち、話を聴けば聴くほど、夫との関係を立て直すことはもうできないのではないかと、つまり症状から解放されるためには離婚へと決意していく方がよいのではないかと思われていたし、また実際、一、二度はそのように洩らしたこともあった。麗子にとっては、そのように第三者からはっきりとつきつめられた問いは、ぎりぎりの土壇場となった。その問いの前で、彼女は口をつぐんだが、内心では「もはやひとりで出直すことはできはしない、もう駄目なのだ」ということが明確化されていった。しかし、このままでもいいのか。こうして神経症症状はますます激しさを加え、状況を直視することは耐えがなくなり、「最悪」といわれる状態に陥っていった。

筆者をはじめの頃、義父によって与えられた強烈にネガティブな男性イメージを変えるためには、治療者との関係を通して新たな別の男性像を彼女が体験していく必要があろうと考えていた。そのためには治療者・患者間のいわゆる転移・逆転移に、現実の夫が入り乱れてのすさまじい人間関係の嵐が吹きすさぶこともおおいに覚悟されるころであった。実際、彼女ははじめから非常に好意的であり、たとえばよく「男の人は普通そういうものですか、先生はどうですか」というようなことも訊いたが、その態度や表情は間違いなくポジティブな関心を示していた。しかしながら、決してそのようなすさまじい転移状況にはならなかった。結局のところ、それは彼女が面接のインタバルを自ら選択し、冷静に治療者との距離をとり続けたからであった。この治療関係における最も肝要な点はまさにこのことのうちに存していたのであると思われる。

こうして不条理な消耗をすることなしに治療者との信頼関係が成立した時に、母親が死亡し、麗子はそのすべての過去から「解放」されることになった。その後、夫については「いい加減で頼りのない単純な人ですけど、根は気のいい人なので」といいつつ、それなりに受け容れていくこともできるようになり、けい子を引き取り、それが裁判になるという問題の中で、その対応を夫にあずけることもできるようになる。彼らははじめて、お互いの伴侶となり、いわば心理的結婚が成立したのであった。この頃の二人には、以前のように互いにあらぬ方向を向いて意地をはりあっているようなちぐはぐした違和感もはやなく、いかにも夫婦としての自然に調和した雰囲気がかもしだされていた。

ここには、一対の夫婦として互いに歩みよっていく男と女のドラマがある。彼らはあらゆる面で正反対の夫婦であった。それはたとえば、自己の器、あるいは枠組と

しての「身体性」のあり方においても、非常に対照的にあらわれていた。麗子のそれは、あまりにもきっちりできすぎ、きわめて閉塞的にその中にすべてを保持しようとする。それは彼女が常にきちんと身を正し、身をつくろおうとする姿勢にも示されている。しかしながら、あまりにも自己完結的であろうとするゆえにまた、それががんじがらめになり、締めつけられすぎて結局、心臓発作を起こしてしまうことにもなる。あるいはまた、他者や外界を「受け容れる」ことができない。不安神経症になる人というのは、このような意味で身体の完結性が優超している場合が多い。これに反して、夫の身体性は他の性格的諸側面と同様に、一言でいえばルースである。彼も覚醒剤中毒になったが、このように容易に嗜癖になりやすい人というのは、そのような自己の器性、枠組がきちんと形成されておらず、外界の異物を容易に取り容れ、また簡単に内部のものを放りだしてしまうような、要するに「だらしのない」人間構造をもっている。従って、彼は職業も金銭も家族も自分の中にちゃんと保持しきることができず、まして重荷になるようなことはとうてい受けとめることができないのである。これとは逆に、麗子はすべてを自分のうちに保持しようとし、むしろ常に重荷を背負ってないと不安にさえなってしまう。あまりに背負おうとし、肩をはろうとするから、「肩がこる」のである。それゆえにこそ、母親が亡くなって、けい子を引き取らざるをえなくなったことがまた、彼女にとってはひとつの生きがいともなったのであった。

このようにして彼らが正反対の生のあり方のうちにあったからこそ、彼らは当初互いにひかれあい、結婚したのであろう。より異質な、より相反したもの同士がひとつに結ばれていくところに、結婚ということの本来の意義があるとするならば、このこと自体はきわめて正当なものであった。しかしながら、異質なものが相補的、補完的にひとつになっていくのではなくて、ただ単にその異質性の違和感ばかりが際立って、ますます反撓と乖離だ

けが前景化するならば、これもはや悲劇とならざるをえない。このようなあり方のうちから二人は、しかし、神経症症状の発現と母親の死亡という二つの事態を通して、互いに歩みよっていくことになった。夫はけい子とそれに関わる問題を「受けとめ」ていこうとし、麗子は夫に「任せる」ことが、あるいは「夫を立てる」ことができるようになっていく。このような夫婦像の変化の過程は、次のエピソードの中にもよくあらわされている。すなわち、麗子は心理療法過程の中で三度にわたって、心の故郷である金沢に帰りたいたいという気持ちを表明したが、その心理的背景はその都度、異なっていた。まず面接開始直後の折には、「ひとりで金沢に帰ってみたい、何か大事な忘れものをしてきたような気がする」と語られたが、そこにはこれまで生きてきた歴史をすべて御破算にし、幼かった昔に戻って、もう一度ははじめから人生をやり直したいという心境のあらわれであった。その次には、母親が死亡した翌年の2月に、やはりひとりで帰ってみたいと述べられたが、この時には雪の金沢の思い出が、すなわち母親と二人ですごした年少期への郷愁と無上のなつかしさが、亡くなった母親への追憶の念とともにかりたてられていたのであった。この時すでに麗子には、母親を「ひとりの女」として受け容れ、許し同情することができていた。こうして過去を引き受けていくことが可能となった時、未来もまたはじめて開かれうるものとなる。三度目に帰りたいたいと思われた時の事情は、しかしまた異なるものであった。すなわち、この時にはそれまで決して人にみられたくないものとして大事に自分の胸の中だけにしまっておきたいと思っていた秘密の財産のようなふる里を夫にみせ、二人のものとして共有したいという心境になったのであった。これを彼女は二人の新婚旅行にしたいと語ったが、まさにそれは二人の心理的結婚の成立にふさわしい再出発のモニュメントとなるものであった。

(1981年7月31日 受稿)